

平城宮第315次発掘調査（第一次大極殿院西辺地区）

現地説明会資料

2000年7月1日

奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部

1. はじめに

朱雀門の真北、平城宮の中心に、第一次大極殿院地区が存在します。第一次大極殿院地区には、奈良時代前期には、もっとも重要な行事に使用される建物である大極殿が存在していました。その後奈良時代後期には、大極殿は東方の第二次大極殿院地区へと移り、この地区は、称徳天皇の居所である「西宮」となっていたと考えられています。さらに都が平安京に遷った平安時代初期にも、この地区は平城太上天皇の居所として利用されていたことが明らかとなっています。

今回の調査地は、第一次大極殿院地区の西辺に当たります。今回の調査は、第一次大極殿の復原整備事業の一環としてなされたもので、第一次大極殿院の西方の状況に関する知見を得ることを目的としました。第一次大極殿院の西側を画する築地回廊から、さらにその西方にかけて、およそ南北15m×東西65m、約975㎡の調査区を設定しました。従来の調査では、本調査区の南側を、1965年度に28次調査として調査したことがあります。今回の調査は4月上旬より始まり、現在も継続中です。

2. 検出した遺構

検出した遺構には、第一次大極殿院地区の築地回廊に関する遺構、南北方向の排水路SD3825、南北溝、掘立柱建物、古墳時代の自然流路などがあります。以下、順番に説明していきます。

築地回廊に関する遺構

第一次大極殿院地区の変遷については、今までの調査成果などから、大きくⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期の時期に区分されています。今回検出した築地回廊についても、この時期区分に従って説明したいと思います。

Ⅰ期：和銅3年(710)の平城遷都の際、第一次大極殿院地区に大極殿が建設されたのに伴って、それをとりまく築地回廊が設置されます。築地回廊とは、中心に築地塀をおき、その両側に柱を立てて屋根を渡し、回廊としている塀のことです。今回の調査区内においては、後世の削平によって築地塀部分は失われていました。しかし回廊の基壇については、版築土を積み上げて回廊の基壇を形成している様相を読みとることができました。また回廊の東側については、屋根からの水を受ける雨落溝が、調査区南端に残っていました。雨落溝は東端に見切り石を並べて、バラス敷き広場との境界とし、底には玉石を敷き詰めています。雨落溝と、築地回廊の現存部分との比高差は約65cmです。雨落溝の肩の高さが当時の地表面と考えられますので、回廊の基壇は、65cm以上の高さを持っていたことが分かります。

しかしこの奈良時代前期の大極殿・築地回廊は、天平12年(740)に聖武天皇が平城京から恭仁京に都を遷したことに伴い、恭仁宮に移築されてしまいます。それに代わる塀として、築地回廊の西側に、掘立柱塀が築かれました。本調査区では、掘立柱の柱穴が3基検出されました。柱間は4.5m(15尺)です。

Ⅱ期：天平17年(745)以降、都は再び平城京に戻ります。築地回廊も元の位置に再建され、

奈良時代後期には、第一次大極殿院地区は「西宮」として称徳天皇の御在所などに使用されたと考えられています。

Ⅲ期：大同4年(809)以降、平城太上天皇は平城宮に戻り、この第一次大極殿院地区に居所を定めます。その際には築地塀のみが再建され、柱と屋根を伴う築地回廊の形はとりませんでした。本調査区からは、築地塀に伴う門が見つかっています。築地想定心上に2つの礎石据付痕跡を、柱間3m(10尺)をおいて検出しました。築地塀を切って作った小規模な穴門と考えています。

ところで今までの調査成果により、大極殿院西回廊は、全体的にやや北で西に振れる傾きを持っていることが分かっています。ただし今回の調査結果によれば、本調査区よりも南側では、その傾きは小さく、北に行くほど傾きが大きくなる傾向にあるようです。

落ち込み状遺構

築地回廊の西方に広がる平坦地には、奈良時代後期に浅く広い落ち込みが作られています。多数の土師器が、投棄された状態で発見されました。ゴミ捨て用の土坑と考えられません。

排水路SD3825

この溝は本調査区南側の、28次調査で検出していた溝で、今回その延長部分を検出しました。位置はおおむね、平城宮の南面西門である若犬養門と、朱雀門との中間にあっています。幅2.6～3m、深さ1.1mの素掘りの溝です。奈良時代初期に開削され、幾度かの浚渫を経た後、奈良時代末に埋没しています。北の佐紀池に源を発して南流する、宮西部の基幹排水路として機能していたと考えられます。この溝からは木簡・木器・埴・瓦・土器など、多様な遺物が出土しました。

南北溝1・掘立柱建物

奈良時代後期には、調査区西端に南北溝1が開削されています。幅1.5～2m、深さ約0.3mで、木簡・木器・土器・瓦などが出土しました。そしてSD3825と南北溝1とに挟まれた幅11mほどの空間に、掘立柱の建物を検出しました。桁行2間以上、梁間2間の南北棟、柱間2.4m(8尺)等間の建物です。

自然流路

調査区西南端で、古墳時代の流路を検出しています。埴輪や炭化材などが出土しています。

3. 出土遺物

木簡：排水路SD3825・南北溝1からは、数十点の木簡が出土しています。内容は多彩ですが、諸国から貢進されてきた米や塩などの荷札、釘に添えられた付札、習書などがあります。

木製品：排水路SD3825・南北溝1からは、大量の木製品も出土しています。主なものとしては、琴の形代・漆器の蓋の一部・轆轤びきの残材などがあります。

銭貨：排水路SD3825の東肩からは、神功開宝1点が出土しました。

瓦・土器類：奈良時代から平安時代前期のものが、調査区全体から数多く出土しました。瓦については特に、築地回廊の西側で、大量の瓦を投棄した土坑を検出しています。また

土器については、前述のように落ち込み状遺構から完形に近いものが多く出土しました。その他、円面硯の破片が出土しています。

埴輪：自然流路からは、4世紀末～5世紀初の朝顔形埴輪が出土しました。

4. おわりに

第一次大極殿院地区が台地上の高所に位置しているのに対し、排水路 SD3825 は谷筋に当たっています。平城宮はその自然地形を利用しながら建設されていますが、今回の調査によって、その様相をかなり明確にできました。築地回廊の西側には、約 1.5 m ほど落ちる段差を設けています。その西側は、20 m 以上にわたって、ほぼ平坦な空閑地が広がっています。その西は、なだらかに下がる長さ約 7 m のスロープがあり、一番低くなったところに基幹排水路 SD3825 が位置します。SD3825 の西側は、平坦な面が続いていきます。比高差は、築地回廊の現存基壇上と、SD3825 の溝の肩とで約 2.5 m でした。恐らくは平城宮の西方から大極殿院を望めば、太い基幹排水路 SD3825 の東側には一段高い空閑地が広がり、そのさらに東側の台地上に、大極殿院がそびえ立つような偉観を呈していたことでしょう。

また、南北溝 1 と掘立柱建物は、SD3825 の西側の空間利用を考える上で重要な素材を提供したといえます。この地域は未だ調査例が少ないので、今回の発掘が一つの契機となり、この地域の性格を今後明らかに出来れば、と思っているところです。

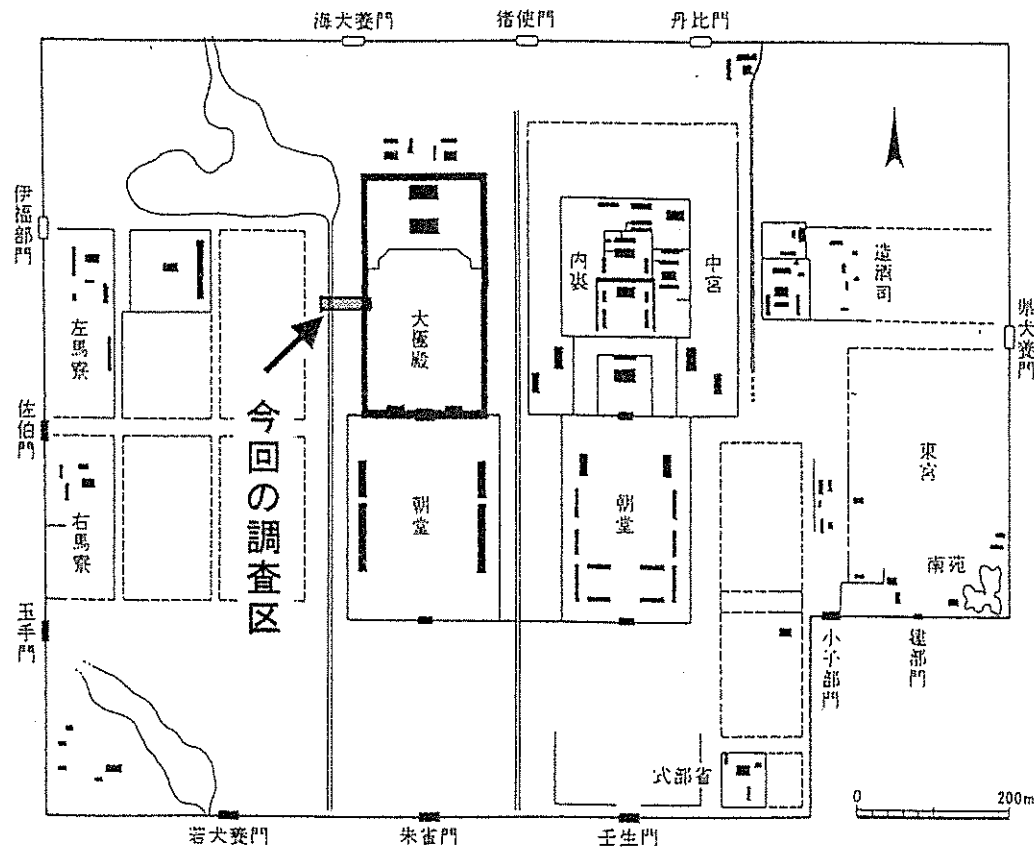
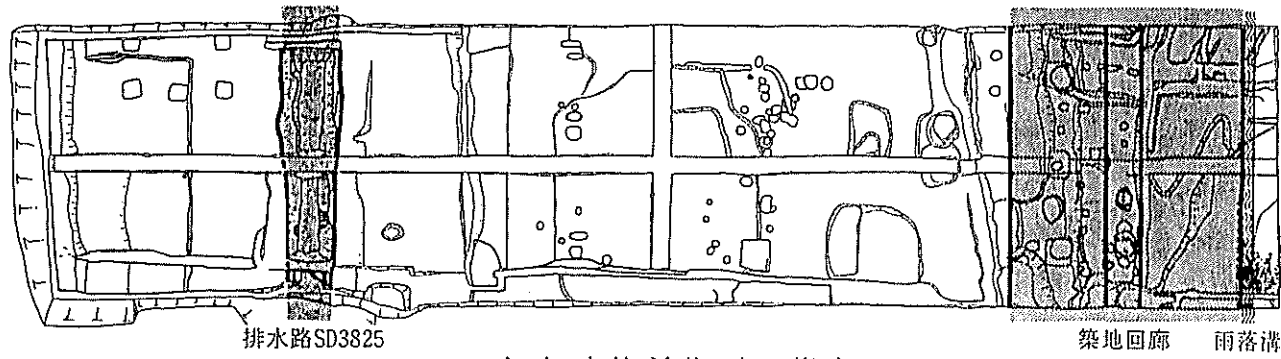


図1 調査区位置図

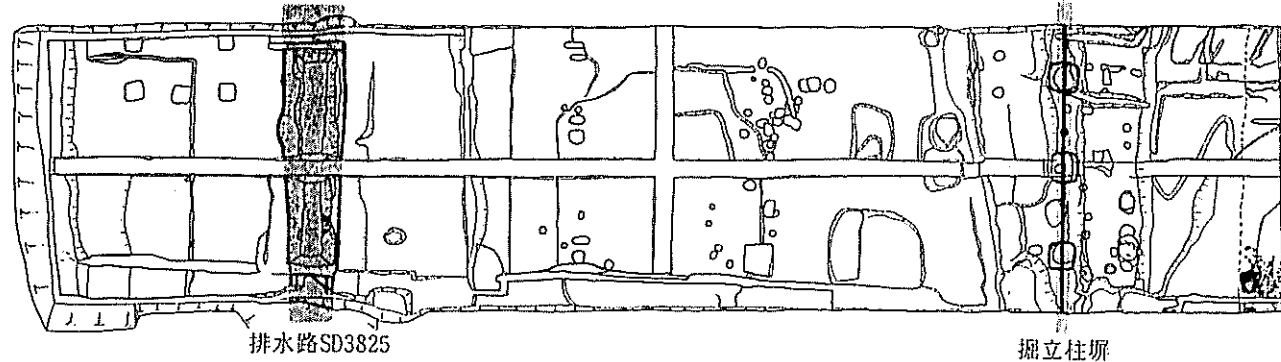
第三十五次調査出土木簡訳文

- ① 但馬国七美郡七美郷春米五斗 伍保三使部身成 天平神護元年四月 221 × 32 × 11 031
- ② 備後国品治郡佐我郷カ 膚米六斗 (133) × 31 × 5 033
- ③ 若狭国遠敷郡余戸里兵衛御調塩カ (132) × 35 × 4 039
- ④ 美濃国山県郡郷カ 三斗十月廿二日カ (193) × (11) × 3 033
- ⑤ 駒椅里雜カ 一斗五升大七斗 (155) × 18 × 6 039
- ⑥ 上郷生部カ 小足カ (153) × (14) × 5 039
- ⑦ 忍寸カ 159 × 20 × 2 051
- ⑧ 秦宿奈万呂カ 薦二枚 (122) × 18 × 5 039
- ⑨ 釘肆佰玖隻 197 × 35 × 6 011
- ⑩ 右件稻者正下十日上進以解 古文孝経徒進 (296) × (44) × 3 081
 (真筆1) 鳴鳥 (真筆2) 南無佐无
 (真筆3) 鳴鳥 (真筆3) 鳴鳥
- ⑪ 日奉弟麻呂 (74) × (10) × 2 081
- ⑫ 徳女 (133) × 9 × 5 019
- ⑬ 若大甘部 若校部 (193) × (25) × 4 081

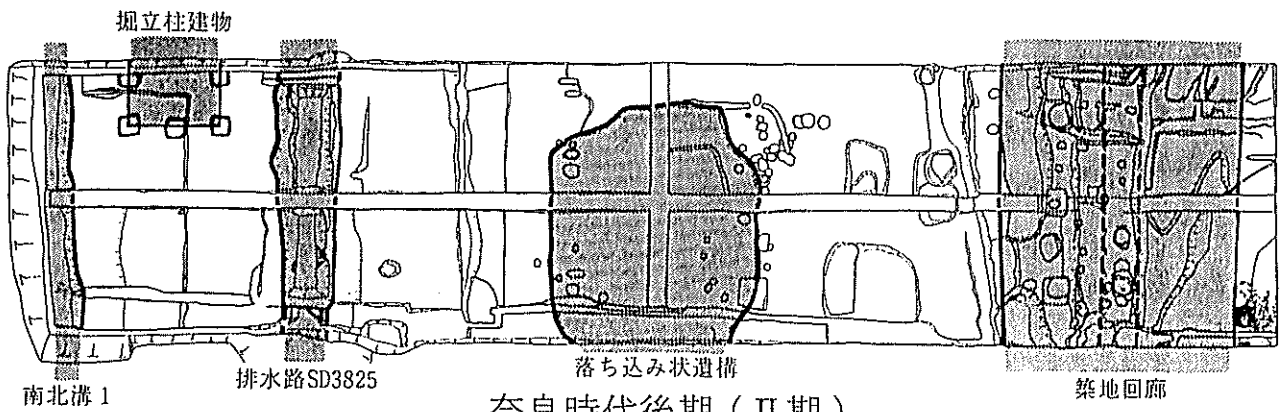




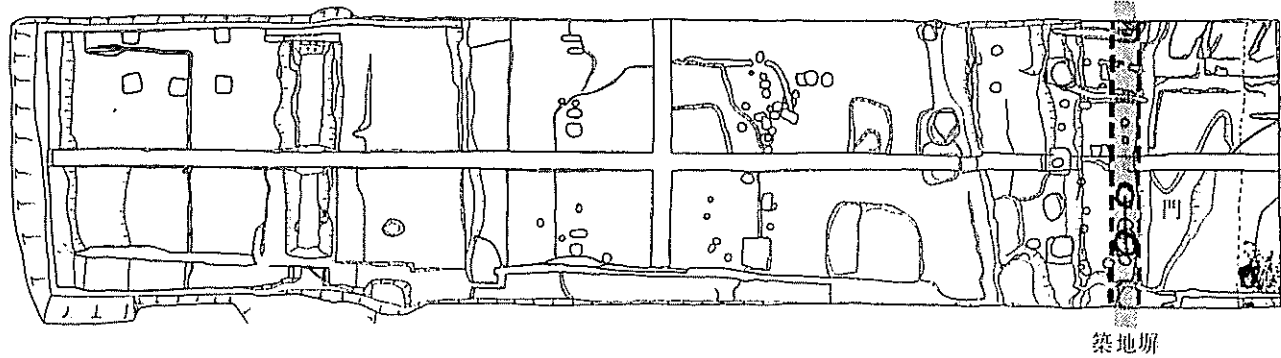
奈良時代前期 (I期)



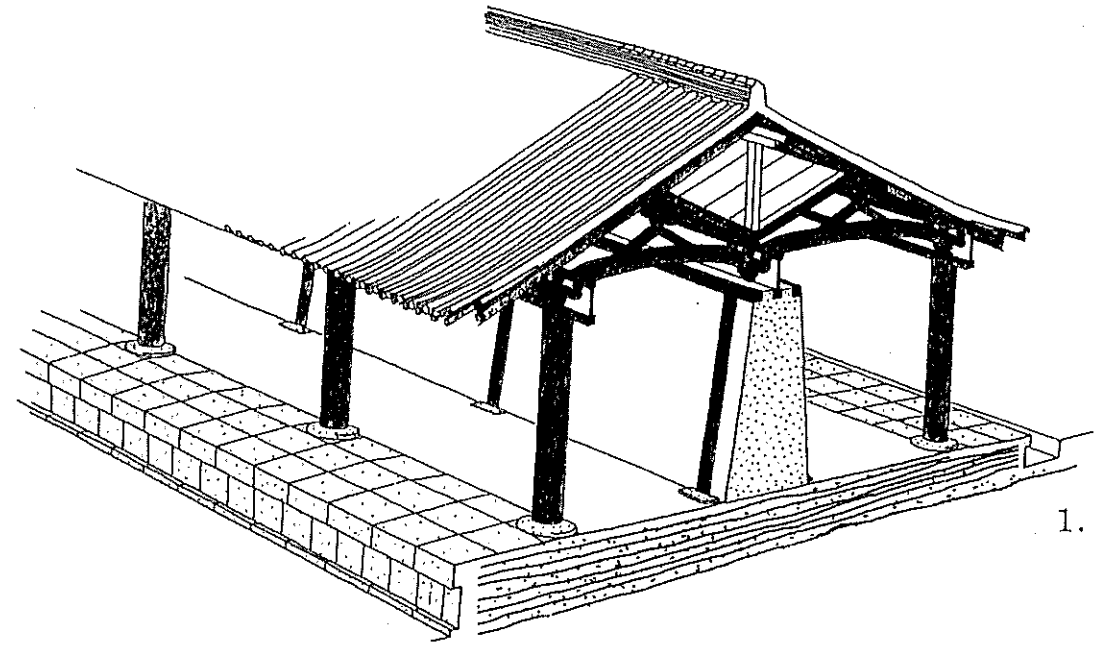
奈良時代中期 (I期末)



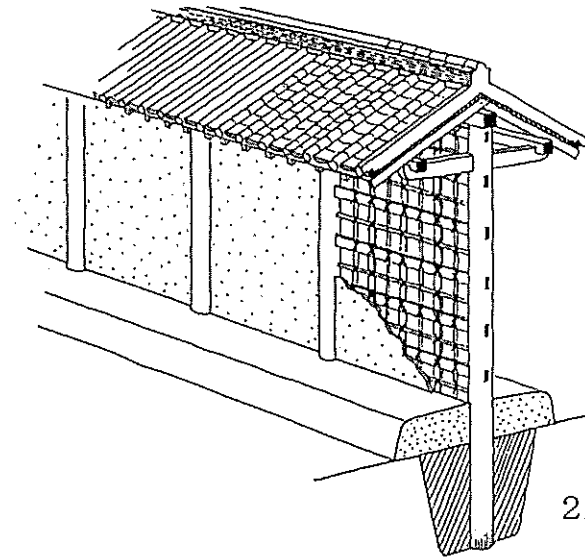
奈良時代後期 (II期)



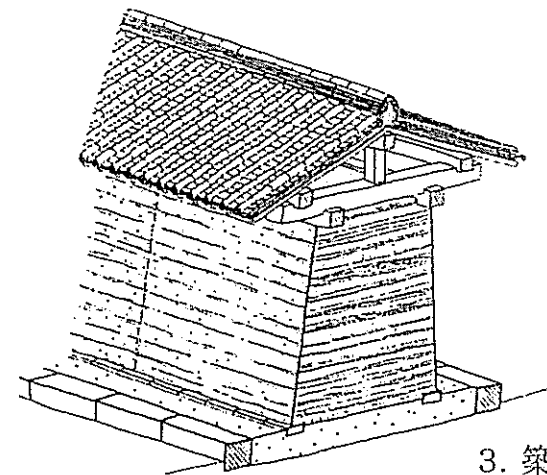
平安時代初期 (III期)



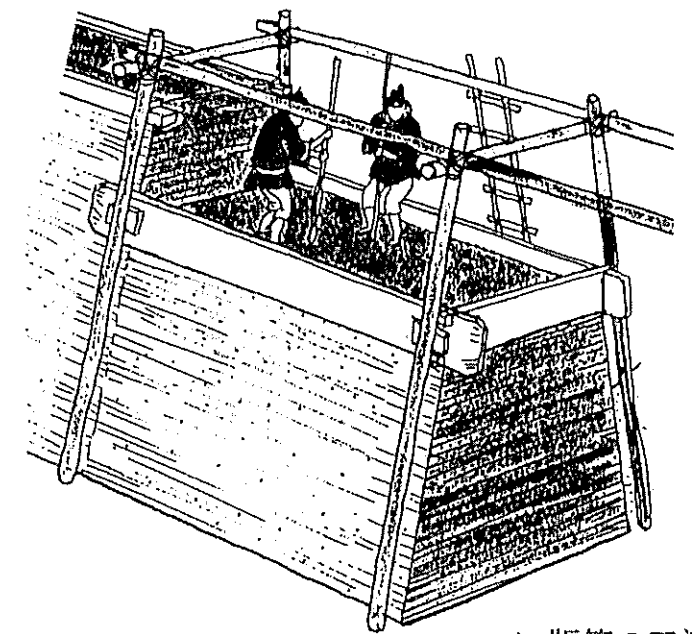
1. 築地回廊



2. 掘立柱塀



3. 築地塀



4. 版築の工法

(1, 2, 4 宮本長二郎・穂積和夫著『日本人はどのように建造物をつくってきたか? 平城京』草思社
3 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部『藤原の宮と京 展示案内』)

図2 遺構変遷図

平城宮第315次発掘調査 - 第一次大極殿院西辺地区 - 遺構図

